

# わわたしたちの目に映る島



二〇一一年九月の三宅島大学開校直後から、わたしたち慶應義塾大学加藤文俊研究室は三宅島大学のリサーチプロジェクトの一環として島内で暮らす人々のポスターづくりを行なつてきた。このプロジェクトは島内で民宿を営む女将さんを取材し、島と女将さんの魅力を詰め込んだポスターをつくることからスタートした。その後は、三宅島キッズリサーに参加した子どもたちや、島で働く男性の魅力を伝えるポスターをつくり、三宅島大学本校舎である御嶽島会館で小さな展示会を何度か行なつてきた。そして今年、過去のポスターを一挙に展示する「三宅島ポスター・プロジェクト展」を開催することとなつた。展示の会場は竹芝旅客ターミナルで、三宅島で働く女将さんのポスターを展示している。

そして今日、三宅島ポスター・プロジェクトのもうひとつの会場、阿古船



セントラルの会場準備をわたしたち加藤文俊研究室と三宅島大学のスタッフで行なつた。ここでは、三宅島キッズリサーで制作されたポスターと島で働く男性のポスター、今年三宅島大学を卒業する田中耕介さんの卒業制作「三宅島モザイクアート」を展示する。十一月

客待合所ここぼーと二階の三宅村交流センターの会場準備をわたしたち加藤文俊研究室と三宅島大学のスタッフで行

十八日・十九日は展示をお休みまで。七日間、九時から十七時まで展示をしている。島民の方々にはぜひ足を運んでいただきたい。(都合により

十八日・十九日は展示をお休み)

昨晚、わたしたちは竹芝旅客ターミナルのポスター展を見てから船に乗つ

てきました。ポスターを見ると過去二年半

の活動がよみがえり、同時に三宅島の

様子が頭をよぎつた。六時間の船旅を

終えて、三宅島会場でポスター展の準

備をしていると、この島に住む人の魅

力をこの島の人たちに知つてもらいた

いという想いが湧いてくる。年に数回

三宅島に足を運ぶわたしたちの島への

関わり方は断片的であり、わたしたち

が見つけ伝える事の出来る三宅島の魅

力は数ある島の魅力のほんの一部かも

れない。それでも、わたしたちが継

続してきた成果がこのポスターであ

り、わたしたちの目から見た三宅島で

暮らす人々そのものである。内地へ行

く機会のある方には、東京会場のポス

タープロジェクト展も見てもらいた

い。わたしたちは日曜日の船で内地に

戻る。ポスター展に足を運んだ方は感

想をぜひ聞かせてほしい。

(伊藤圭)

景色の一部となる不思議な作品として完成される。網と網のつなぎ目が斜めになつていていることや編み目の大きさが一つ一つ異なつてゐるのは、力加減や編み方のくせなど全国各地のそらあみの紡ぎ手の個性が表れているためである。

「あみが初めて空に向かつていつたのは舞鶴だつたね。」そう話すのは、そらあみを制作するアーティストの五十嵐靖晃さん。五十嵐さんが三宅島の漁師に漁網の編み方を教わつたのは二〇一一年六月、三宅島大学開設の為の網が空に立ち上がつたら面白いな。」

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

そらあみは人の関係性をも変えてしまふ。言葉ではないコミュニケーション、五十嵐さんはそう形容する。

浅草、塩竈、釜石、瀬戸内、三宅島で紡がれてきたそらあみと、それらによつて繋がれた各地の紡ぎ手達が三宅島に帰つてきた。日本各地で編まれてきたそらあみは三宅島で一つの大きなそらあみとして仕立て上げられる。

全国を巡つたそらあみ。誕生の地、三宅島で「一体どんな表情を見せてくれるのだろう。」

『そらあみ・三宅島』帰島式は本日より三池港で行われる。ぜひ足を運んでみて欲しい。

(秋庭大志郎)

2013年  
(平成25年)  
11月16日  
土曜日  
あしたばん編集部  
発行所: 加藤文俊研究室  
info@ashitaban.net  
http://ashitaban.net/

第四十二号

おかげり、そらあみ。

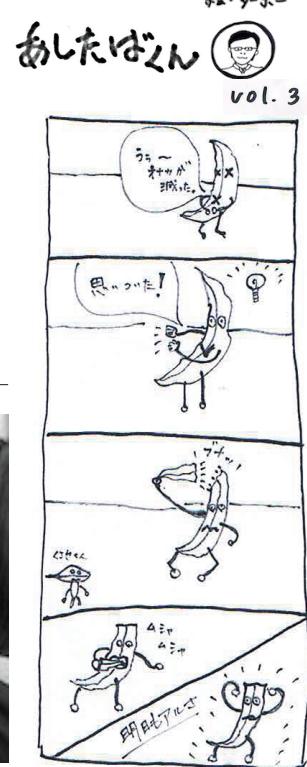


地里佳さん(二十五歳)にお話を伺つた。今年の十月一日から三宅島に住み始め、すでに一ヶ月以上過ごしている。彼女は、今夏まで慶應義塾大学院政策メディア研究科の学生として過ごし、繩の宮古島で、実家はパン屋を営んでいた。高校卒業と同時に島を出て東京に来た。そして、三宅島を研究対象とした論文で修士号を取得し今に至る。彼女が初めて三宅島を訪れたのは、二〇一一年の六月。その夏に、「女の子のバイトを募集している」と呼びかけていた築穴製菓さんの元で住み込みバイトを一ヶ月続けた。まだ縁もゆかりもない島で働くなんて戻り込みしてしまいそうだが、「なんか、面白そうだな」と思つてやつてみることにしたそうだ。実家がパン屋ということも、何かの縁が巡っているのだろう。

その後に研究活動として島で過ごす時間も多く、マネージャーとして休み時間などを無駄遣いする上地さんの語り口調は、なんだか朗らかで、それは、強い好奇心から滲み出るもののように思えてならない。その好奇心から始まつた三宅島との

三宅島大学のマネージャーである上地里佳さん(二十五歳)にお話を伺つた。今年の十月一日から三宅島に住み始め、すでに一ヶ月以上過ごしている。彼女は、今夏まで慶應義塾大学院政策

## 好奇心がつなぐ縁



関わりはすでに長く、そしてこれからも続いて行く。ひとえに「周りの人に生かされた」と語る上地さんの謙虚な姿勢が、ここまで彼女を導いているような気がした。彼女は、この夏まで僕の大学の先輩だった。また、同じ研究室の所属として一年間同じ時間を過ごした仲間でもある。こうしてまた会えて、話を聞くことが出来たのも、上地さんがつないでくれた縁によるものだと思う。

(深澤 匠)



## 食卓への架け橋

三宅島での食事を語る上で欠かせない食材である魚。毎回私達のお腹を満たしてくれるその食材は、様々な人の手を渡つた後に食卓まで運ばれる。

今回私は、神奈川の横須賀出身の石戸祥一さんにお話を伺つた。石戸さんは、三年前に島に来て、現在は島の漁業組合で現場作業員として働いている。普段は阿古港にて漁師が釣りあげた魚の仕分けをし、お魚センターや東京の漁連等に魚を売るという仕事を行つている。普段はあまり表に出ることのない仕事であるが、毎日四百キロ近い魚を仕分けて売る、いわば漁師と私達の食卓の間の架け橋であるこの仕事は、島の生活を大きく支えている。

石戸さんのお話を聞いてみると、自分が好きな様子がひしむと伝わってきた。仕事で嬉しかったことを聞いてみた。仕事で嬉しかったことを聞いてみると、三百キロのマグロがあがつた話をしてくれ、オンドオフの切り替えがある。のれんをくぐると、中央に四人用

テーブル席が数個と、右側にカウンター式のテーブルがはつきりと見える。メニューは中華料理が専門。夫婦で料理を作る。私はタンメンを注文したが、コシのある細麺は、色とりどりの野菜と舌を滑らかにすり抜ける至極のものだった。また、岩のりラーメンを食べた小竿まゆる(学生)は、これで「弾力がある」と表現した。

(長富将成)



## 弾力がある?

天候はくもり。もつと自分の足で歩くがつたところが、平野食堂であった。

向かいにある壮大な海岸線の手前で、口の横にある陳列棚にはお持ち帰り用のおまんじゅうが二種類置いてある。のれんをくぐると、中央に四人用

### 三宅島大学ポスタープロジェクト展

三宅島会場	11/16(土)~11/23(土・祝) 9時~17時 ※18(月)・19(火)はお休みです @三宅村交流センター
東京会場	9/6(金)~12/1(日) 7時~22時 @竹芝旅客ターミナル